

146

208

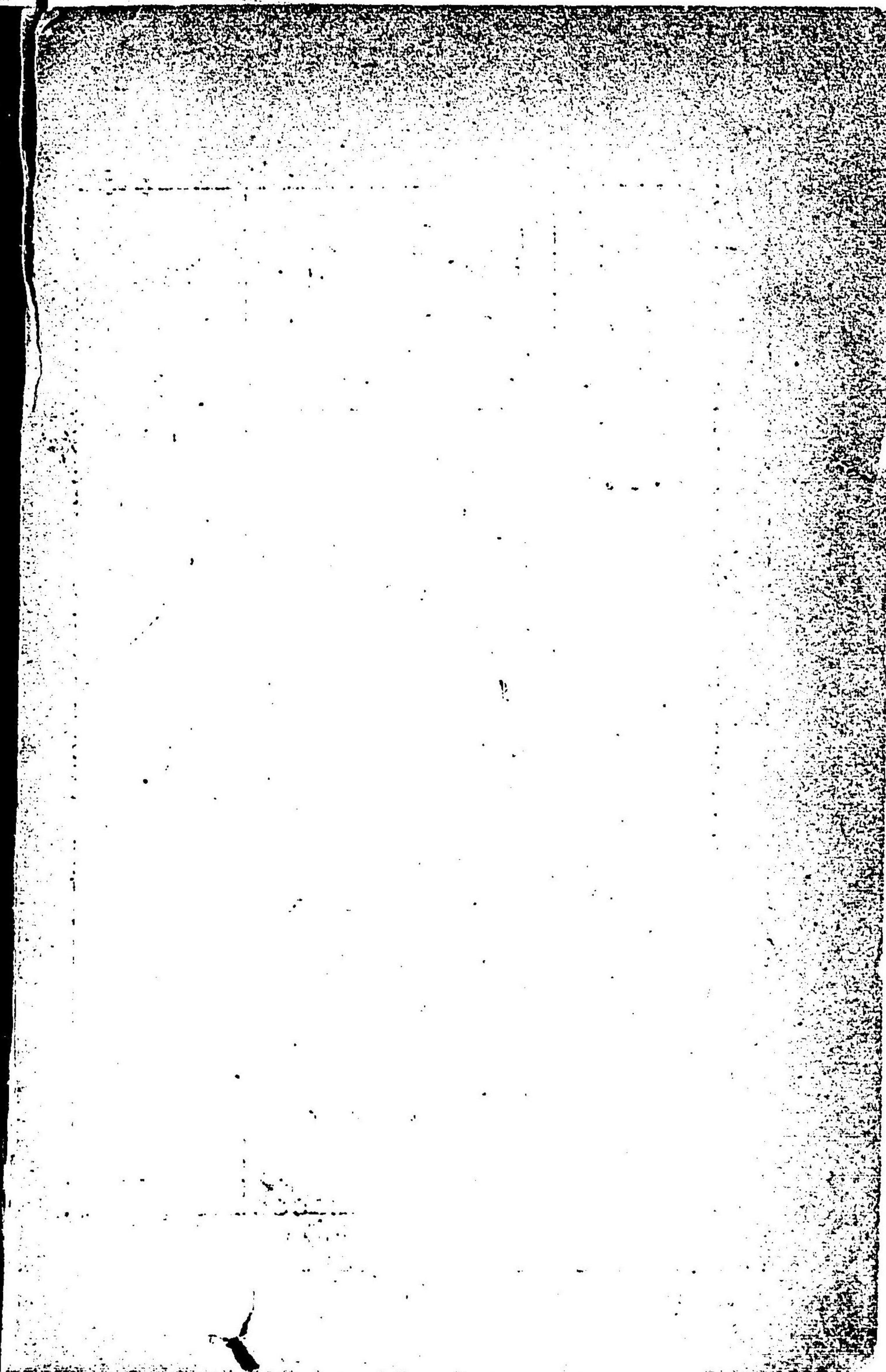
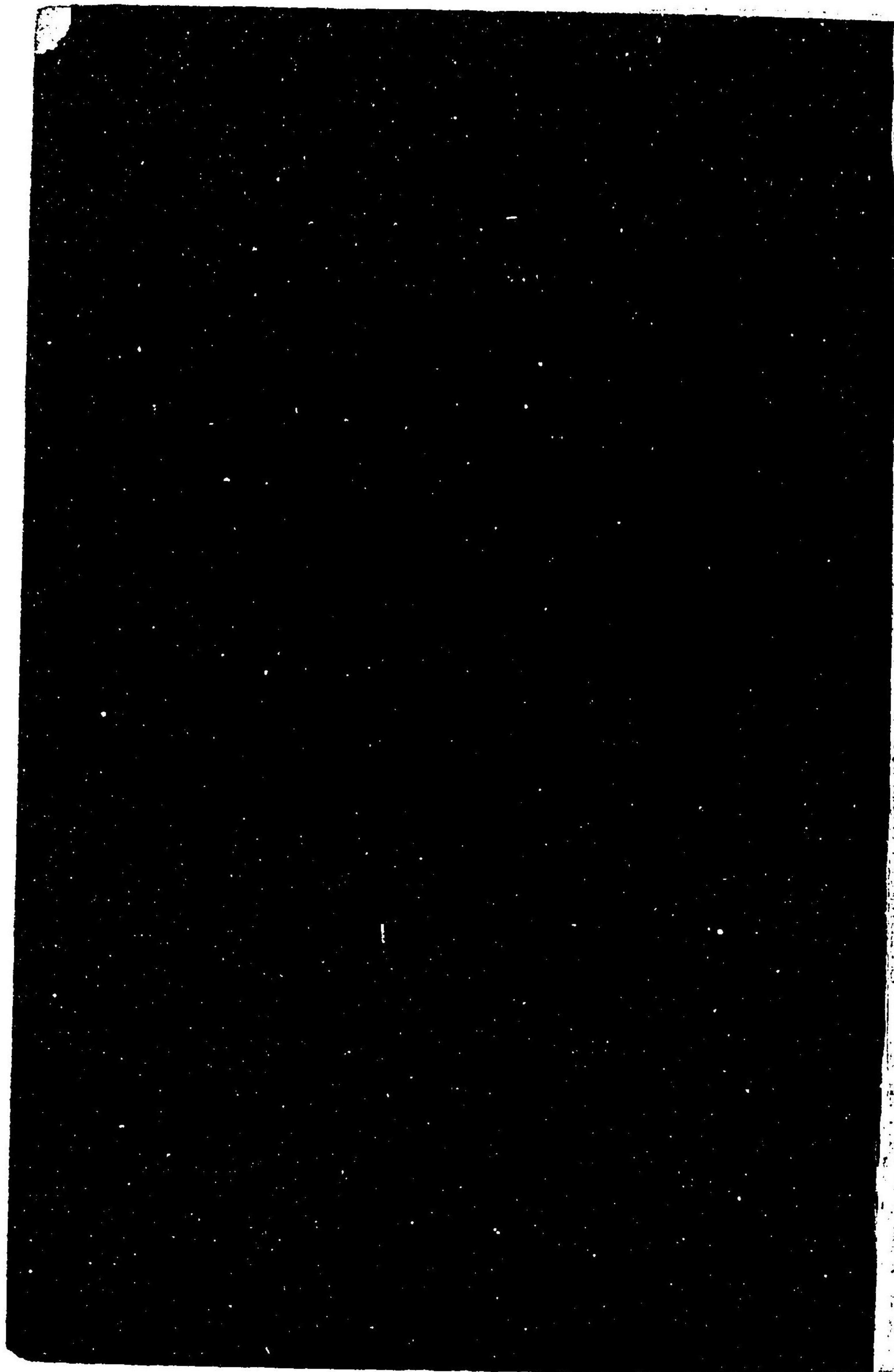
此骨散人著

身氣
勃然

劍舞法
完

正式圖解并豪傑詩歌

東京
金盛堂藏版



特63
135

劍舞法自序

男子は活潑ならざる可からず。若し男子
 にして活潑ならざれば、婦女子と何ぞ擇
 ばんや。然れども治に居て亂を忘るゝは
 古今一轍。而して其治に居るは、誠に慶賀
 すべきもの。是に伴ふて男子の柔弱、彼の婦
 女子と伍を同ふするに至りては、亦た慨
 歎に堪へざるなり。因て居士茲に劍舞法

の一書を編著し聊か士氣を養ふの一端
 に供せんとす諸君請ふ是を以て凡謠俗
 舞の書と同一視する無くんば幸甚

于時明治廿六年第九月下旬秋風颯々たるの夕
 梧桐窓下に於て

武骨居士識

勇氣 勃然 劍舞 法 正式圖解 井豪傑詩歌



武骨散人著

○豫讓

闕名

怒髮衝天 眼如電 爛々直射 襄氏面
 右携一劍 左讎衣 三躍打衣 寸斷
 悲風慘愴 天日暗 讎家君臣 皆無色
 双肝漆身 兩徒爲一死 聊以報智伯

(一) 此舞劍を演ずるの扮装は先づ袴を穿て其左右を高く褰げ
 刀を一本さして兩方の袖を充分に撞り如何にも勇氣を帯

(二) たる壯士の体み擬すべし尤も袴の用意なき時は只袴をのみ袴と同様に褰げるも宜し

第一句 怒髪天を衝て眼電の如し

怒髪天を衝てト吟
 する時は兩方の手を
 を廣げて左右の小
 鬚に當て天を衝て
 と云ふに至つて之
 を上へ伸して毛髪
 の逆立たる体を爲
 し夫より眼電の如



しト二三歩前へ進みながら臀を張て左の手には刀の鏝元
 を握り右の手は右の袴をからげたる体を爲す

第二句 爛々直に射る襄氏の面

爛々直ちに射るト
 一隨に先方を見張
 る息込にて右の手
 を刀の柄へ掛け襄
 氏の面ト少し身体
 を捻りソリ身にな
 つて先方を白眼つ
 ける



(四)

第三句 右に一

劍を携へ左り

に警衣

右に一劍を携へとス

ラット刀を抜き左り

お警衣と左りの手に

脱すてた羽織を執る

(但し是は最初より其

傍へ用意し置くべし

第四句

三躍衣を打ば衣寸断

三躍衣を打バト左の手に持たる羽



織を左も口惜氣に二三度

バタ／＼ト拂き中腰にな

つて右の足を前へ出して

羽織の裾を踏つけ左の足

は後へ引て膝を突き右の

手お持たる刀を以て寸断

／＼に切るの模様を爲す

第五句

悲風慘憺天

日暗く

悲風慘憺ト手に持たる刀

(五)

を右の傍に置ながら右の足を引て左の足と同じく膝を突



(六) て少しく左右に廣げ
 天日暗しと左りの手
 を左りの膝の處へ逆
 に突て肩を怒らし顔
 を仰向け天を見て右
 の手をあげ人さし指
 みて空を指さす

第六句 警家の
 君臣皆な色無

警家の君臣と身体を少しく前へ出し右の手の人さし指を



出したまハズツと正面の
 左りの方を指さして是を
 右の方へと一字に引き夫
 より皆色無しと左右の手
 を後へ突き胡坐を組て驚
 きたる体を爲す

第七句 肝に及し身
 に漆する兩ながら
 徒爲

(七) 肝に及しと兩方の手にて
 胸を左右へ開き右の手に



(九)

手で胸を開き右の手に
 刀を執り美事に切腹す
 るの体を爲し智伯に報
 せんト兩手を伸し手掌
 を上お向け辭儀をして
 備へ物をする模様を爲
 し終る



(八)

て胸を撫で身ふ漆する
 ト右の手で左りの腕を
 撫で又左りの手で右の
 腕を撫で兩ながら徒爲
 ト右の手を膝へ突き左
 の手で涙を拂ふ体を爲
 す

第八句 一死聊か
 以て智伯に報せ
 ん
 一死聊か以てト左りの



(十)

○加藤清正

闕名

蹴破三韓八道風。浪哈海外馬如龍。

丈夫亦是非無淚。泣指雲間一點峰。

此劍舞の扮装も前と同じく袴の左右を高く褰げ後ろ鉢巻をして右の小腕に四五尺の竹又は棒をかひ込で鎗に擬すべし尤も馬上の心持あるを要す

第一句 蹴破る三韓八道の風

右の小腕に鎗をかひ込で左りの手み拳を作り肩を怒らし

たま蹴破る三韓ト三
四歩前へ進み出で八道の風ト左りの左に手綱を執る體を爲す



第二句 浪哈海外馬龍の如し

(十一) 浪哈海外ト左りの手の手綱を引しめ右の手に鎗を持たるまゝズット手を伸して左の方より右へと一字み引き馬龍

(二十)

の如しとたぢ
こと二三歩後へ
退つて再び元の
處へ戻る

第三句

夫も亦是

れ涙無き

に非ず

丈夫も亦是れト

向ふを見ながら

手に持たる鎗を



其處へ落し涙無
きに非ずト少し
俯む

第四句

泣

ては指さ

す雲間一

點の峯

泣ては指さす雲

間ト右の手で涙

を拂ひ遙かに富

(三十)

士山の見へる心持みて指をさし夫より一點の峯ト左右の



(四十)

手に手綱を執り少しくソリ身みなり向ふを見張て終る

○兵兒謠

頼山陽

衣至肝袖至腕 腰間秋水鐵可斷

人觸斬人馬觸斬馬 十八結交健兒社

北客能來以何酬 彈丸硝藥是膳羞

客若不屬麩 好以寶刀加彼頭

此劍舞を演ずるには刀を一本さし着物の裾を短かく凡る
臍の邊りまで褰ぐべし

第一句 衣肝に至り袖腕ふ至る

(五十)

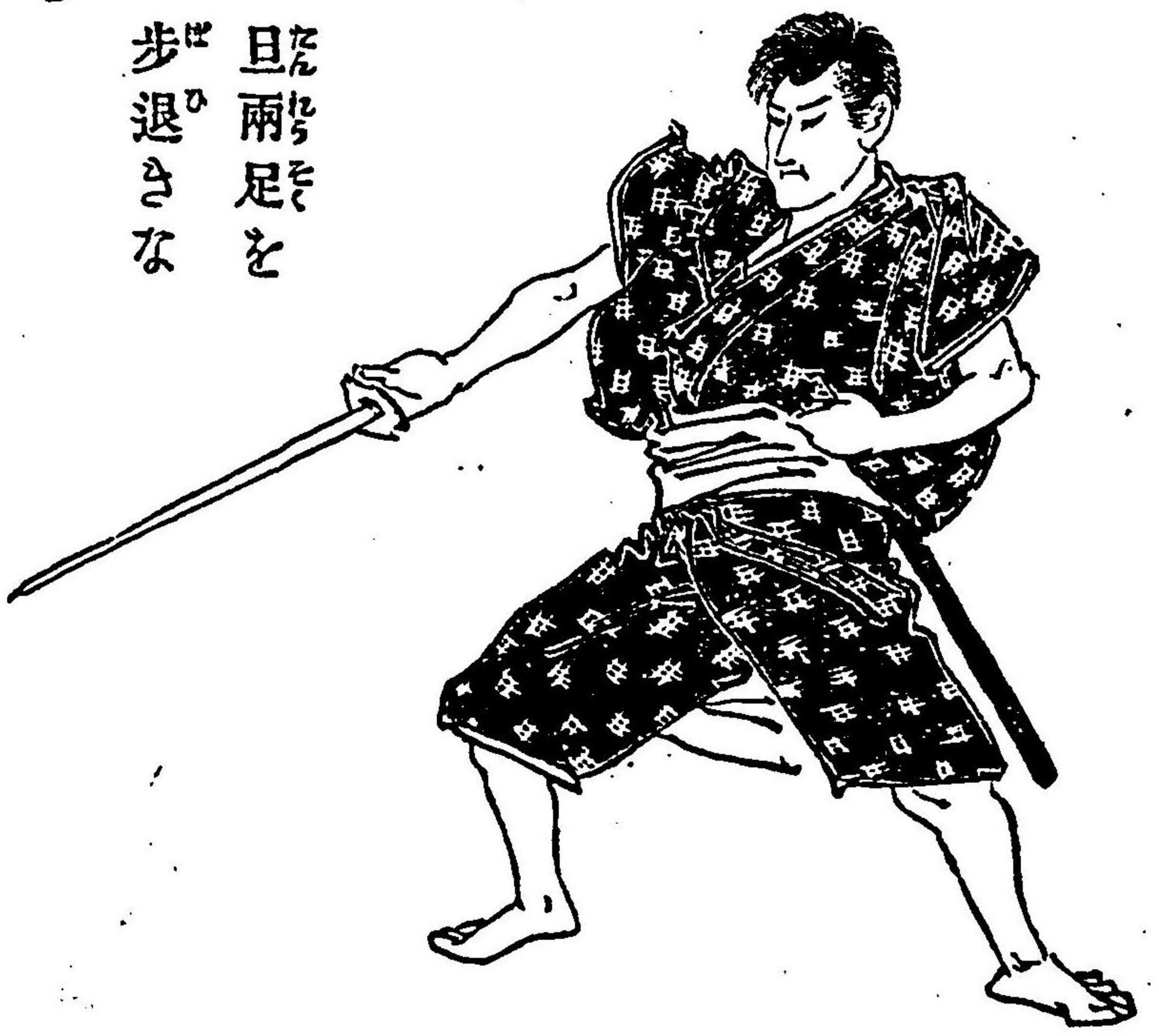
衣肝に至りト左
右の手を帶の下
七八寸の處まで
下げ一寸左右の
裾を褰げる様子
を爲し夫より袖
腕に至るト先づ
右の手にて左
の袖を充分に捲
り續で又た左の手にて右の袖を捲る

第二句 腰間の秋水鐵も斷べし



(六十)

腰間のト左の足を
一步退ぞき秋水ト
吟ずると同時に左
の手にて刀の鏝元
を握り右の手を刀
の柄へかけ鐵も断
べしトスラリと抜
き放ち兩手を柄へ
掛て真向に振かぶり一旦兩足を
揃へ直に左りの足を一步退きな
がら勢ひ能く斬り下る



第三句

人觸れば人を斬り馬觸れば馬を斬る

(七十)

人觸ればト再び
兩足を揃へ又た
刀を真向に振被
つて人を斬りト
左りの足を一步
退き身體を少し
横にして左りへ
斜に斬り下げ馬
觸ればト又た兩
足を揃へ再び刀
を振り上げ馬を
斬るト



(八十)

第四句

十八交りを結ぶ健兒の社

右の足を一步退き身體を少し横にして右へ斜に斬り下る
 へて刀を鞘へ納め交りを結ぶト
 左右の手を伸し指と指とを組合して一寸引繰返して掌を向ふへ
 見せ健兒の社ト左りの手は左りへ下して帯を握み右の手を伸して友達の腕を抱へ込たるの體を爲す



(九十)

第五句

北客能く來らは何を以てか酬ひん

北客ト身體を少し右の方へ廻し右の手の食指を以て北の方を指さし能く來らばト屈めたる指を伸して人を招くの態を爲し何を以てか酬ひんと左右の手を拱き少し俯向て考へる體を爲す



第六句

彈丸硝藥是れ膳羞

(十二)

彈丸硝薬ト刀を鞘のまゝ、抜て左の手に持ち右の手を腰へ遣て彈丸を取り出す状を爲し夫より左の手に持たる刀を鐵砲に擬して之に詰込の體を爲し是れ膳羞ト左の足の膝を立て爪先を少しく前へ出し右の足は膝を疊へつけ後ろは踵を臀へつけ指を折て疊へ接し少しく前を開き身體を斜にして左の手にて刀の鏝元を支



へ脇を膝へ突き右の手は脇を張りて耳の邊りへ接し全く鐵砲を撃の狀を爲す即はち圖の如し

第七句 客若し屬壓せずんば

(一十二)

客若しとット立て刀を左の手お提げ屬壓せずんばト右の手に刀を持ち替て元の如く腰へ刺し左の足を一步退て少しく身體を斜



(二十二)

に左の手を鏝元へかけ右の手み柄を握りて身構へを爲す
第八句 好し寶刀を以て彼が頭に加へん

好し寶刀を以てト
スラリと抜て柄へ
双手を掛たるまゝ
真向み振被り彼が
頭に加へんト左の
足を一步退き伸掛
つて上より下へ勢
ひ能く斬下て終る



○楓江夜泊

張 繼

月落烏啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。
姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。

此詩を舞には別に用意の品なし只裙を高く巻げて腰袋の
如くし兩袖を宜き程に捲りて小舟み居る船頭の心持ある
べし

第一句 月落烏啼て霜天み滿つ

(三十二)

兩足を揃へてツト立ち月落ト吟じ出したるとき身体を少
し反し左右の手を正面へ伸して拇指と食指にて月の形ち

(四十二)

を作り之を上
より下へ下る
と同時に左り
の足を一步退
ながら鳥啼て
ト左りの手を
左方へ引き右
の手を伸し食指にて向ふを指さし霜天に満つト身體を其
儘中腰に屈み仰向て空を眺めつゝ右の手の食指にて空を
指さす



第二句 江楓の漁火愁眠に對す

(五十二)

江楓のト左右の手を後
へ突て左の方より右の
方まで静かみ見廻し漁
火ト右の手の食指にて
右手の中程を指さし愁
民に對すト右の手の肱
を曲て枕とし一寸仮寢
の状を爲す



第三句 姑蘇城外の寒山寺

姑蘇城外とフト目の覺めたる様子にて左右の手掌を以て

(六十二)

兩眼を摩り欠伸を
しながら左右の手
を握りて一旦左右
の下へ伸し夫より
兩方へ高く上げ寒
山寺ト鐘の聲の聞
へし体にて右の指
を折て數へる



第四句

夜半の鐘聲とツト立て左りの足を前へ出し兩手に撞木の

(七十二)

綱を執たる体にて
鐘を衝く真似を爲
し夫より客船に到
ると左の足を退て
右の足を一步前へ
出し左右の手を伸
して櫓を漕ぐ体を
爲し終る



○太田道灌

新井白石

孤鞍衝雨叩茅茨。小婦爲贈花一枝。
 小婦不言花不語。英雄心緒亂如絲。
 此詩を演舞するには先づ袴を穿て其左右を高く塞げ弓を擬すべき四五尺の竹を一本用意すべし

第一句 孤鞍雨を衝て茅茨を叩く

豫て用意したる四五尺の竹を弓に擬して左の手に取り之を左の小脇にかひ込み孤鞍雨を衝てト右の手小陣笠を持

たる心持にて頭上へ高くかざし
 二三步前へ進み
 出で茅茨を叩く
 と少し身体を右
 にひねり右の手に拳を作りて戸を叩く状を爲す

第二句 小

婦爲に贈る花一枝

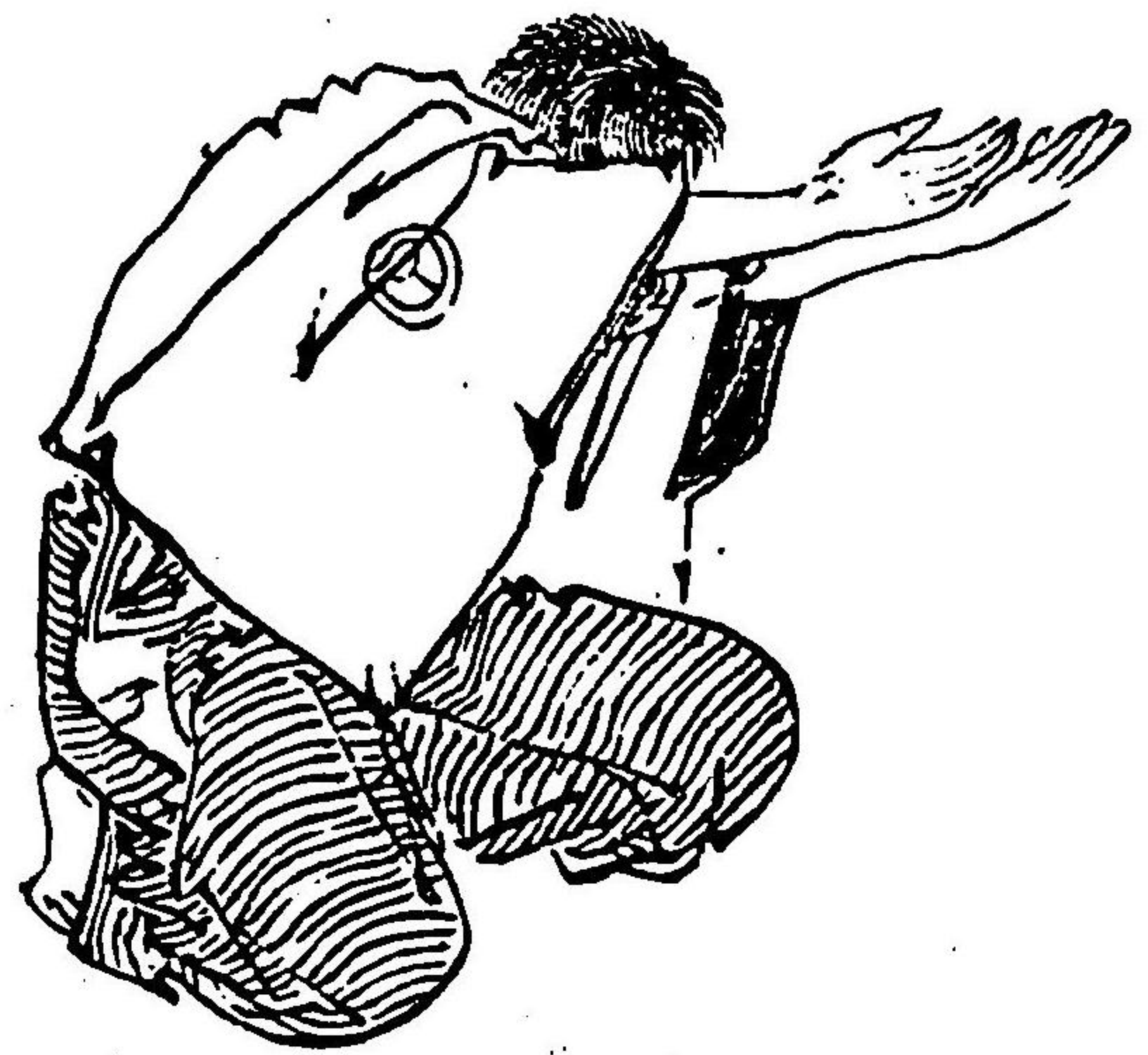


(十三)

小婦爲めに贈るト其處
へ跪づきて手お持たる
弓を傍へ置き左りの手
お盆を持たる心持にて
右の手を伸して一寸花
を折り之を盆にのせる
体を爲し花一枝と盆お
両手を掛たる状おて俯
向て恭やしく之を前へ
差し出す

第三句

小婦は言はず花語らす



小婦は言はずと盆
に載た花を其處
へ置き左りの袖
にて耻かしさう
に口を隠し花語
らすト右の手を
伸し食指にて花
を指さす

(一十三)

第四句

英雄の心緒ト其處へ置たる弓を元の如く左りの手お取り
英雄の心緒亂れて絲の如し



(二十三)

前まへにある花はなを見
つめながらズツ
と立たち亂らんれて絲いと
の如ごとしトグツと
弓ゆみを小脇こわきに抱かか込こ
みつゝ右みぎの手てを
懐ふところに差さ入いれ暫しばし
首かぶを垂たれ思案しあんの
体ていにて終おる



(以下圖を略す)

○不ふ識し庵あん擊き機き山さん圖ず 賴らい 山さん陽やう
鞭べん聲せい肅しゆく々く夜よる渡わた河か 曉あかつき見み千せん兵べい擁ゆう大だい牙が
遺い恨こん十じゆ年ねん磨ま一いつ劍けん 流りゆう星せい光くわう底てい逸いつ長ちやう蛇だ
此この演えん舞ぶも亦また袴はかまの左ひだり右みぎを高たかく褰かげ兩袖りやうそでを充じゆう分ぶんに捲まりて刀かたな
を一本いっぴんさすべし

第一句 鞭聲肅々夜河を渡る

(三十三)

鞭聲べんせい肅しゆく々くと吟ぎんずる時ときは馬うまみ乗のりて右みぎの手てには鞭むちを持もち左ひだ
りの手ては手綱たづなを執とりたる心持こころもちにて右みぎの手てを後うしろへ廻まして
馬うまの尻しりを打うつ体ていを爲なす左ひだりの手ては前まへへ曲まげて手綱たづなを引ひしめる
様子ようすを爲なしながら勢いきほひよく三四步さんしよふ前まへへ進すすみ夜河よるがを渡わたるト

(四十三)

後に廻したる右の手を再び前へ廻し左の手と共に手綱を執たる体にて兩足を少しく左右に廣げ肩を少しく右手に捻り少々反身になつて向ふを見る

第二句 曉に見る千兵の大牙を擁するを

曉に見るト右の手を額へかざして向ふを眺め千兵のト右の手を下し食指にて左の方より右手へ一字を切り大牙を擁するをト同じく右の手を胸の邊りへ曲て大いなる旗を立てたる体を爲す

第三句 遺恨十年一劍を磨し

遺恨十年と右の手にて年を數ふる体を爲し一劍を磨しと左の手を刀の鏝元へかけ右の手にてスラリと抜き放ち左

の手の掌を一寸身の中程へ押當て研ぐ真似を爲す

第四句 流星光底に長蛇を逸す

流星光底にト左の手を下右の手に刀を掲げしまゝ仰向て空を眺めフト俯向たる途端に長蛇を逸すト刀の柄へ雙手をかけて真向に振被り左の足を一步退と同時ふ上より下へと斬り下げて終る

○日本刀

大鳥圭助

鍛冶研磨幾百回 霜降三尺玉無埃

不疑日本刀銳利 曾試盤根錯節一來

(五十三)

此演舞も袴を穿て左右を高く褰げ腰ふは刀の鞘のみを刺

(六十三)

し右の手に拔刀を提げたる儘舞場へ出べし尤も兩袖は襷にて充分に絞り上げる

第一句 鍛冶研磨す幾百回

鍛冶研磨すト先づ胡坐を組て左の手に刀の柄を持ち左より右の前へ斜に刀を出し幾百回ト右の手を振あげ鎚を保持たる心持にて刀をねらひ二三度打つ体を爲す

第二句 霜降三尺玉に埃無し

霜降三尺ト刀の柄を右の手に持直しズット一旦向ふへと手を伸して見玉に埃無しト再び目の前へ横へ刀の表裏共に隈なく見る

第三句 疑はず日本刀の鋭利なる事を

疑はずト右の手に刀を提げてツト立ち日本刀の鋭利なる事をト左の手にて左の袴の裾を取り是にて刀を一拭ひ拭ひて鞘へ納む

第四句 曾て盤根錯節を試み來る

曾てト左の手を刀の鏝元へかけ右の手に刀の柄を握り盤根錯節をトすらりと抜き放ちて縦横に斬る体を爲し試み來るト刀の柄へ雙手をかけ眞向に振かぶりて左の足を一歩退くと同時に上より下へと斬り下げて終る

○ 仲秋

菅原道真

(七十三)

去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此 捧持毎日拜餘香

此演舞は袴を穿くのみにて他に用意の事なし但し左右を
寒ぐるに及ばず

第一句 去年の今夜清涼に侍す

先づ袴の裾を捌ひて行儀よく坐り去年の今夜ト左の手を
膝に突き少しく身体を左へ曲る心持にて右の手を伸し指
を折て物を算ふる体を爲し清涼に侍すト左右へ手を突き
少しく俯向く

第二句 秋思の詩篇獨り斷腸

秋思の詩篇ト左の手紙を取り右の手に筆を執り一寸字
を書く体を爲して前へ置き獨り斷腸ト兩手を膝の上へ置

て少し愁ひを含みたる様子を爲す

第三句 恩賜の御衣今此に在り

恩賜の御衣ト左の手を袖の中へ入れて袖口を握り其儘胸
へをし當て一寸俯向て袖の表を見夫より今此に在りト左
の袖を開き右の手の食指にて袖を指さす

第四句 捧持して毎日餘香を拜す

捧持して毎日ト少し身体を屈し兩手を正面へ伸し手の掌
を上おして物を奉つるの体を爲し餘香を拜すト膝の前へ
兩手を突き辭儀をすする模様にて終る

○ 出郷作

佐野竹之助

決然去國向天涯 生別又兼死別時

弟妹不知阿兄志 慇懃牽袖問歸期

此演舞も亦た袴を穿て刀を指の外別不用意の事なし

第一句 決然國を去て天涯に向ふ

決然國を去てト左右の手を以て各々その袖の前より後へ
パタ／＼と一叩きづゝ叩き拂ひて左右の袖を捲り上げ天
涯に向ふト左の手にて刀の鏝元を握り右の手を伸して向
ふを指さす

第二句 生別又兼ね死別の時

生別又た兼ねト左右の手を膝の所へ下して少し首を下
死別の時ト少し仰向き左右の手の掌を目に押あてゝ涙を
拂ふの體を爲す

第三句 弟妹は知らず阿兄の志し

弟妹は知らずト左右の手を横手へ下たるまゝ首を回らし
て右の肩と左の肩より一度づゝ後を見阿兄の志しト左右
の手を拱き少し俯向て思案の體を爲す

第四句 慇懃に袖を牽て歸期を問ふ

慇懃に袖を牽てト其所へ跪づいて左の手を疊へ突き右の
手を上へ伸して袂を引張る體を爲し歸期を問ふト身體を
少し捻り下より上を覗き顔を見る様子にて終る

○逸題

闕名

大聲呼酒坐高樓 豪氣將吞五大洲
一寸丹心三尺劍 揮拳先試佞人頭

(二十四)

此演舞は成べく活潑に演ずるを宜しとす故に例の如く袴の左右を高く寒げ兩袖も充分に捲りて腰に刀を刺し右の手に大杯に擬すべき物を用意すべし

第一句

大聲酒を呼で高樓に坐す

右の手に大いなる杯を擬したる器を持ち左の手は臂を張て左の帶の所を握み大聲酒を呼で右の手に大杯を持たるまゝ杯の片縁が胸に接する位に肱を張て前へ抱へ二三歩前へ進みつゝズット手を伸して其杯を前へ出し高樓に坐すト其所へ胡坐を組て杯を前へ置く

第二句

豪氣將お呑んとす五大洲

豪氣將に呑んとすト臂を張て左右の手を杯の兩方にかけて

グット上へ舉て口の傍へ持て行き五大洲ト顔を仰向て大杯の酒を飲乾の體を爲す

第三句

一寸の丹心三尺の劍

一寸の丹心ト左の手に杯を持て下へ置と同時に右の手に胸を撫で三尺の劍ト左の手を刀の鏝元へかけてズット立ち鞘のまゝ少しく抜き右の手を柄へかけやうとして足元をヒヨロ／＼とする

第四句

拳を揮ふて先づ試む佞人の頭を

拳を揮ふて先づ試むト左右の手に拳を固め右の手を伸したるまゝ前後へ二三度振り佞人の頭をト右の拳をズット上へあげ右手より伸掛つて左の方へ拂ひ終る

(三十四)

編者曰く元來劍舞なるものは一定の舞法ある者に非ず已に一定の舞法無ければ師傳も亦之れなき理なり故に齊しく劍舞と雖も其人に因て多少異なる所あるを免かれず然れば能く其詩の意味を會得し以上の例によつて之を爲せば何人にてても容易く演舞するを得べし因て圖解は此に止め是より劍舞に用ゆべき古今の詩作を撰撰して左に掲ぐ

劍舞詩篇之部

○富士

石川丈山

仙客來遊雲外巔 神龍栖老洞中淵

雪如純素烟如柄 白扇倒懸東海天

○陣中作

上杉謙信

霜滿軍營秋氣清 數行過鴈月三更
越山併得能州景 遮莫家鄉憶遠征

○過桶狹間

太田綿城

荒原弔古古墳前 戰克將驕何得全
輕風吹雨晝如晦 驚破奇兵降自天

○壁書

釋清狂

(五十四) 男子立志出鄉關 學若不成死不還

(六十四)

埋骨豈唯墳墓地

人間到處有青山

○漫作

蒲生君平

丈夫生有四方志

千里劍書何處尋

身任轉蓬無遠近

思隨流水幾浮沈

笑看樽酒狂先發

泣讀離騷醉後吟

唯賴太平恩澤渥

自將章句託青衿

○戊辰作

小松帶刀

聞說中原虎狼橫

誰先慷慨唱勤王

腰間頻動雙龍氣

欲向東天吐彩光

○訣妻子

梅田雲濱

妻臥病床兒泣飢

挺身直欲拂洋夷

今朝死別兼生別

唯有皇天土知

○失題

村井政禮

此時此恨又何窮

毛髮皆鳴刀鏑風

白日空濛天色怒

滿檀輕雨斬英雄

○逸題

西鄉隆盛

不養虎兮不養豺

亦是九州西一涯

七百年來舊知所

百二都城皆我儕

(七十四)

(八十四) 壓倒海南三尺劍
人若欲識余居處

蹂躪天下七寸鞋
長住甕城千石街

○劍舞歌

安積五郎

日出國兮有名寶
光芒電閃夏猶寒
請看日出男兒膽
犯礮丸兮陷堅陣
有死之榮無生辱

百鍊精鐵所鍛造
風蕭々兮髮衝冠
蹈白刃兮犯礮丸
縱橫捕擊山岳震
不須將臺受約束

○偶成

大鳥圭助

水陸三千共進兵
上丘一望敵方近

兩軍今日決輸贏
觸袖飛丸憂有聲

○鐵槍歌

釋月照

(九十四) 天下散亂法王場
八面談鋒三尺喙
大聲不入里人耳
但我赤心憂國誠
布施來謝維何物
良工百鍊一條鐵

指揮如意說邊防
銳利如槍不可當
聞者驚愕走且僵
徹透武人金鐵腸
傳來丈八緣沈槍
三稜磨刀凜秋霜

(十五) 豫期決戰攘夷日。縱橫馳突貫豺狼。
善用鐵槍驍勇號。不讓朱梁王彥章。

○偶感 釋日鑑

勿謂閑遊費壁陰。宜開活眼養禪心。
雲飛山聳是真佛。水響鳥吟亦梵音。

○水戶浪士 闕名

呼狂呼賊任人評。昨日雨聲今日晴。
恰是清明好時節。櫻田門外血如櫻。

○泊天草洋 賴山陽

雲耶山耶吳耶越。水天鬚髯青一髮。
万里泊舟天草洋。煙橫蓬窗日漸沒。
瞥見大魚波間躍。太白當船明似月。

○獄中作 賴三樹

排雲欲手掃妖星。失却落來江戶城。
井底痴蛙過憂慮。天邊大月缺高明。
身臨鼎鑊家無信。夢斬鯨鯢劍有聲。
風雨多年苔石面。誰題日本古狂生。

○題常盤抱孤圖 梁川星巖

(二十五)

雲壓笠檐風捲袂
他年鐵柺峰頭嶮

呱々索乳奈何情
叱叱三軍是此聲

○夢攻諸厄利亞

藤田東湖

絕海連檣十萬兵

雄心落々壓胡城

三更夢覺幽窓下

唯有秋聲似雨聲

○夏夕即事

天岸靜里

黃昏涼雨打紗城

恰似圍中得援兵

一掃蚊軍何愉快

不聞四面楚歌聲

○書感

雲井龍雄

決眦睨來宇宙虛

浩歌豪飲割肥猪

唯令三寸舌猶在

何必區々須讀書

○無題

細川賴之

人生五十愧無功

花木春過夏已中

滿室蒼蠅掃難去

起尋禪榻臥清風

○和文天祥正氣歌

藤田東湖

天地正大氣粹然鍾神州
秀爲不二嶽

巍々聳千秋注爲大瀛水
洋々環八州

發爲萬朶櫻衆芳難與儔
凝爲百鍊鐵

(三十五)

銳利可斷。蓋臣皆熊羆。武夫盡好仇。
 神州孰君臨。萬古仰天皇。皇風洽六合。
 明德侔太陽。不世無汚隆。正氣時放光。
 乃參大連議。侃々排瞿曇。乃助明主斷。
 燄々焚伽藍。中郎曾用之。宗社磐石安。
 清鷹曾用之。妖僧肝膽寒。忽揮龍口劍。
 虜使頭足分。忽起西海颶。怒濤殲胡氛。
 志賀月明夜。陽爲鳳輦巡。芳野戰酣日。
 又代帝子屯。或投鎌倉窟。憂憤正惜々。

或伴櫻井驛。遺訓何慙慙。或守伏見城。
 一旅當萬軍。或殉天目山。幽囚不忘君。
 承平二百歲。斯氣常獲伸。然方其鬱屈。
 生四十七人。乃知人雖亡。英靈未曾泯。
 長在天地間。隱然叙彝倫。孰能扶持之。
 卓立東海濱。忠誠尊皇室。孝敬事天神。
 修文與奮武。誓欲清胡塵。一朝天步艱。
 邦君身先淪。頑鈍不知機。罪戾及孤臣。
 孤臣因葛藟。君寃向誰陳。孤子遠墳墓。

(六十五)

何以謝先親。荏苒二周星。獨有斯氣隨。
嗟予雖萬死。豈忍與汝離。屈伸附天地。
生死復奚疑。生當雪君冤。復見張網維。
死為忠義鬼。極天護皇基。

○馬上

伊達政宗

邪法迷邦唱不終。圖南鵬翼何時奮。

欲征蠻國未成功。久待扶搖万里風。

○讀秦記

新井白石

霜刃一銷皆入秦。

咸陽銅狄為傳神。

莫言天下渾無事。

猶有江東學劍人。

○擬送人從軍

賴春水

滄海為池山是城。請看昔日鯨魚腹。

朦朧報警曷須驚。葬得胡兵十万兵。

○發江戶

源齊昭

白髮蒼顏萬死餘。寶刀難染洋夷血。

平生豪氣未全除。却想南陽舊草廬。

○偶成

鍋島閑叟

(七十五)

孤島結團意氣豪。

西南決誓万重濤。

(八十五)

黠奴若有窺邊事

羶血飽膏日本刀

○皇統歌

大窪天民

天地開闢來。大統長相傳。天子無姓名。定知姓是天。天皇如日月。万古無變遷。誰道周德盛。劣能八百年。為嬴為劉後。至今已二年。其間幾姓氏。相代互忽焉。如何日出國。相傳自綿々。

○秋日小梅邸樓上

藤田東潮

高樓接水々連空

駿嶽常山指願中

誰識疎簾半垂處

三秋風物老英雄

○述懷

武田耕雲齋

崖山沃血澆乘輿。却怪文章經學士。

禮樂衣冠掃地虛。年來畢竟讀何書。

○獄中漫吟

齋藤監物

時事關心難作眠。滿胸忠憤悲歌夕。

喚風延月轉悽然。懷起文山就義年。

○送吉田松陰

橋本佐內

磊落軒昂意氣豪

聞說夫君瞻生毛

(九十五)

(十六) 想_ヒ看_ル痛飲京兆夕。

○偶成

大橋順藏

君辱_{ラレ}臣死_ス是_レ此_レ時_。
廟堂一日苟安計。

扼腕頻_ニ睨_ム日本刀。
狼眼虎額來相_ヒ窺_フ。
八万陣中無_レ男兒。

○瑞鷓鴣

賴杏坪

五條橋上一神童。
擁_シ面_ヲ提_リ刀_ヲ知何物。
抛_チ刀_ヲ服_シ了_ル神通術。
芳野安關多少險。

走_ル如_シ流星飛_ブ如_シ風。
三千徒裏武藏坊。
自_レ是_レ終身約_ス僕從_ヲ。
郎當扶_テ得_ル舊牛郎。

○西南役

天岸靜里

百二_ニ都城聳_ニ海陬_ニ。
山棚幾載收_メ橋士_ヲ。
洋館論_シ心膏繼_キ晷_ノ。
准陰背_シ漢果_ニ何怨_ソ。

居然_{タル}形勝跨_ニ三州_ニ。
督府一朝推_ス臥彪_ヲ。
轅門軟_テ血氣橫_リ秋_ノ。
蓋世功名水上漚_ノ。

○全

全

(一十六)
豕突狼奔彼_レ一時。
豈無_シ簞食壺漿日_。
寒日失_レ光雲慘愴。

休_メ言_ヲ遺臭亦男兒。
當_ニ有_ル風聲鶴唳時_。
春田不_レ釋_キ草迷離。

(二十六)

生民久在妖氛裡

只要旭旗爲一麾

○獄中作

川瀬狂庵

死忠死孝臣子分

從容只待就典刑

聞說外夷猶未征

無復慷慨揭錦旌

四海何處非王土

孰能赴々爲干城

翻憾回天策不行

妖霧黯黯蔽軍營

空爲廷尉獄裏虜

閑却胸中百万兵

○逸題

堀織部正

曠世奇才欽兩賢

行藏易地業皆然

氣節千秋出師表

清高万古去來篇

苦辛本識由三顧

勇退無心戴二天

男子功名應若是

縱教一醉曲肱眠

○題兒嶋高德題櫻樹圖 齋藤監物

踏破千山万嶽烟

鸞輿今日到何處

短篋直入虎狼窟

一匕深探鮫鱔洲

報國丹心嗟獨力

回天事業奈空拳

數行紅淚兩行字

付與櫻花奏九天

(三十六)

○示熊本諸友

吉田松蔭

(四十六)

使酒好劉動怒噴
 孔聖在陳嘆歸乎
 慎言謹行養名望
 漢疏廣受宋王旦
 釀來因循姑息風
 吾來熊本接多士
 聞吾鯨吞劍舞發浩歌
 苟使此氣塞天地
 浮躁淺露似而非

豪談雄辯見天真
 豈得非思此種人
 眉壽康寧世爭珍
 或在朝也俗或比之鳳與麟
 養成驕虜與強臣
 熊府多士素温淳
 揭臂叱咤氣始振
 古道何曾憂荆榛
 巧言令色鮮矣仁

請見山嶽巍々凌天起

江河蕩々捲地臻

○偶成

木戸孝允

一穗寒燈照眼明
 回首知己人已遠
 世難多事万骨枯
 歲如流水去不返
 邦家前路不容易
 山堂半夜夢難結

沉思默坐無限情
 丈夫畢竟豈謀名
 禁城風物幾變更
 人似草木爭春榮
 三千餘万奈蒼生
 千岳万峰風雨聲

(五十六)

○失題

平野次郎

(六十六)

龍驤虎口寄此身。他日九原埋骨處。

半世功名一夢中。刑餘誰又認孤忠。

○夢覺而賦一律

武市半平太

戎夷壓海，事方急。

駑馬加鞭，馳赴難。

巨礮轟々如裂地。

鯨濤沸々似崩山。

因循君子忽飛魄。

切迫頑生稍解顏。

一臂奮揮，夢驚覺。

孤燈明滅，雨潛々。

○到瓊浦途上

久坂通武

路到長崎，意氣豪。

青山絕處，是鯨濤。

慨然放眼，撫孤劍。

壓海蠻船，百尺高。

○歸自米國

玉虫佐太夫

万里波濤，幾苦艱。

豈料今日，得生還。

夢耶非夢，看初覺。

青黛依然，日本山。

○逸題

大原重朝

丈夫身死，不爲仁。

便是獸心，人面人。

博浪鐵椎，今若得。

擊破兇頭，爲微塵。

○拜順德帝山陵

宮部增實

陪臣執命，奈無羞。

天日喪光，沈北阪。

(七十六)

(八十六)

遺恨千年又何極

一刀不斷賊人頭

○述懷

藤田東湖

三決死矣而不死
五乞閑地不得閑
邦家隆替非偶然
自驚塵垢盈皮膚
嫖姚定遠不可期
苟明大義正人心
斯心奮發誓神明

二十五回渡刀水
三十九年七處徙
人生得失豈徒爾
猶餘忠義填骨髓
丘明馬遷空自企
皇道奚患不興起
古人有云斃後已

○從軍作

藤田小四郎

憂時慨世真無用
營外今晨人若問

嘯月吟花却有情
將軍醉臥未全醒

○題豐王舊宅

物茂卿

絕海樓船震大明
千山風雨時々惡

寧知此地長柴荆
只作當年叱咤聲

○題肖像圖

新井白石

(九十六)

蒼顏如鐵髮如銀
五尺小身渾是膽

紫石稜々電射人
明時何用畫麒麟

(十七)

○夜下墨水

服部南郭

金龍山畔江月浮。
扁舟不往天如水。

江搖月湧金龍流。
兩岸秋風下二州。

○鎮西八郎歌

賴山陽

兩日爭天々無光。
誰掣吾肘不得發。
堂々源家大八郎。
桀狗吠堯豈得已。
琉球彈丸不足當。

吾射一日墮扶桑。
黑雲壓城劍折鉞。
射可凌犁猿臂長。
猶勝伯也學豺狼。
吾大羽箭。

(一十七)

聊且才取救死亡。
羆熊入夢啼嗶々。
誅賊有國眞天王。
偶與蠻客同夜航。
春禘秋嘗簇冠裳。
絕海雲浪白龍驤。
何異十郎自郎當。
一鋪破得南天荒。
隔海魯衛竝永昌。

蠻酋納女留將種。
膂力類父好身手。
賴生南遊薩山陽。
爲語太廟祀始祖。
憶公一官唾不顧。
縱使公助乃姪起。
鷄口牛後公所擇。
却有姪孫周封強。
一宗慶澤何洋溢。

(二十七)

非_レ緣_ニ源泉分_ニ天潢_ヲ
使_シ公有_ラ知_ル瞋_ン眼_ヲ張_ン
女牛低_レ地_ニ海茫茫

唯恨封冊由_ル殊俗_ニ
作_リ歌_ヲ屬_ス客_ニ々已睡_ル

○出都作

賴三樹

當年意氣欲_ス凌_{ント}雲_ヲ
今日遞途春雨冷_{ナリ}

快馬東馳不見_レ山_ヲ
檻車搖_ン夢_ヲ渡_ル函關_ヲ

○偶成

渡邊華山

鄭老畫_テ蘭_ヲ不_レ畫_カ土_ヲ
醉來寫_シ竹_ヲ似_リ蘆_ノ葉_ニ

有_レ爲_ス者_ハ必_ス有_ラ不_レ爲_ル
不_レ作_ニ鷗波無_レ節_ノ枝_ヲ

○逸題

源齊昭

四海千万國。吞噬互_ニ爲_レ君。唯知堯舜域。
忽_チ付_ニ犬羊群_ニ。警戒宜_ク及_フ時_ニ。天未_ダ喪_ニ斯_ノ文_ヲ。
文修武振日。一夫敵_ス万軍_ニ。

○贈水戸黃門

鶴島閑叟

(三十七)

回_シ頭_ヲ世上漫_ニ紛_ニ々_ニ。
天下英雄纔_ニ屈_シ指_ヲ。
林梢風斂_ハ鳥聲滑_{カニ}。
自_ラ戒_ム宴安如_シ鳩_ノ毒_ニ。

敢_テ以_テ毀譽_ヲ付_ス白雲_ニ。
平生知己獨_リ逢_フ君_ニ。
欄角日暄梅氣薰_ル。
從來治_ル國_ヲ要_ス勞動_ヲ。

(四十七)

○述懷

縱令藩人評賊生
十年辛苦今已解

天朝容我下忠名
默笑獄中待落成

平野次郎

○述懷

雲井龍雄

生不聊生死不死
立馬湖山彼一時
我生有涯愁無涯
咄々休說斷腸事

呻吟聲裡仆又起
雄飛壯圖長已矣
悠悠前途果如何
滿江風雨波生花

○逆櫓

賴山陽

海風打舷船腹穿
前設順櫓却逆櫓
猪耶鹿耶君奚疑

東兒慣馬不慣船
公唯直前是猪武
爲鬼爲蜮君未知

○獄中作

橋本佐内

二十六年夢裡過
天祥大節胸心折

顧思平昔感滋多
土室猶吟正氣歌

○赤間關

有吉良明

(五十七)

豐山突兀筑山橫
無限春風多少恨

海水茫茫波不平
飄然思到小倉城

○逸題

山内容堂

(六十七)

風捲妖雲日欲斜
多難關意不思家
誰知此裏有餘裕
立馬郊原看菜花

○蒙古來

賴山陽

筑海颶風連天黑
蔽海而來者何賊
蒙古來來自北
東西次第期吞食
嚇得趙家老寡婦
持此來擬男兒國
相摸太郎膽如甕
防海將士人各力
蒙古來吾不怖
關東令如山

直前斫賊不許顧

倒吾檣登虜艦

擒虞將吾軍喊

可恨東風一驅附大濤

不使羶血盡膏日本刀

○下筑後川過菊池寂阿公戰處

感而有作

全

(七十七)
文政之元十一月
吾下筑水儻舟筏
水流如箭万雷吼
過之使人豎毛髮
居民何記正平際
行客長思己亥歲
當時國賊擅鳴張
七道望風助豺狼

(八十七)

勤王、諸將前後没。
遺詔哀痛猶在耳。
大舉來犯彼何人。
河亂軍聲代銜枚。
馬傷胄破氣益奮。
被箭如蝟目皆裂。
歸來河水笑洗刀。
四世全節誰儔侶。
棣萼未肯向北風。

西陲僅存臣武光。
擁護龍種同生死。
誓剪滅之報天子。
刀戟相摩八千師。
斬敵取胄奪馬騎。
六万賊軍終挫折。
血迸奔湍噴紅雪。
九國逡巡西征府。
殉國劍傳自乃父。

(九十七)

嘗郤明使壯本朝。
丈夫要貴知順逆。
河流滔々去不還。
千載姦黨骨亦朽。
聊弔鬼雄歌長句。
○瓢兮歌

豈與恭猷同日語。
少貳大友何狗鼠。
遙望肥嶺嚮南雲。
獨有苦節傳芳芬。
猶覺河聲激餘怒。
汝曾熟知顏子賢。
盡以美祿延天年。
性命猶付驥尾傳。

藤田東湖

(十八)

瓢兮々々吾愛汝。汝又曾受豐公憐。
 金裝粲爛從軍日。一勝加一百且千。
 千瓢向處無勁敵。叱咤忽握四海權。
 瓢兮々々吾愛汝。悠悠時運幾變遷。
 亞聖至樂誰復踵。豐公雄圖何忽焉。
 不須獨醒吟澤畔。唯合長醉伴謫仙。
 瓢兮々々吾愛汝。汝能愛酒不愧天。
 消息盈虛與時行。有酒危坐無酒轉。
 汝危坐時吾未醉。汝欲顛時吾欲眠。

一醉一眠我事足。

世上窮通何處邊。

○失題

全

余年十八九。雄氣正堂堂。坐上客常滿。
 樽前肉如岡。細行雖未檢。謂不負彼蒼。
 飄然伴書劍。跋涉山水鄉。乘月棹墨陀。
 冒雪訪梅莊。艷陽春三月。走馬賞花王。
 香雲垂十里。壓倒蜀海棠。百篇詩不就。
 一斗李白量。長堤揮金鞭。馳驅誇王良。
 遊學春又秋。多是自徜徉。半肩一瓢輕。

(一十八)

(二十八)

左腰三尺長。不拂仲舉室。直踞元龍牀。
忽過三十歲。壯心殆如亡。身世附陸沈。
何肯問行藏。芸窓耽典籍。名利兩相忘。
君不見身毒。浮屠邏馬妖。氣吞坤輿勢。
鷹揚誰識孤忠奉。斯道要溯大原廣。
濫觴。

○述懷

蒲生君平

短褐空過二十年。悠悠世事誤周旋。
會期大義驕侯國。豈意微軀屈市廛。

求友一鄉無共語。

讀書千卷有誰憐。

明時在野還知分。

瓢飲又非顏子賢。

○書感

全

丈夫二十尙無名。

學劍中休射半成。

器量渾非萬人敵。

不知終是一書生。

○漁父圖

伊藤仁齋

兩髮皤々鬢雪垂。

蘆州水淺吐花時。

好將整頓乾坤手。

獨向江湖理釣絲。

○偶作

武田信玄

(三十八)

(四十八)

鑿殺江南十萬兵。
豎僧不識山川主。

腰間一劍血猶腥。
向我慙慙問姓名。

○謫居作

菅原道真

黃萎顏色白霜頭。

况復千餘里外投。

昔被榮華簪組縛。

今爲貶謫草萊囚。

月光似鏡無明罪。

風氣如刀不斷愁。

隨見隨聞皆慘憺。

此秋獨作我身秋。

○伴阿母溯淀川

賴山陽

履聲喧蓬土。過橋已離城。
縵路經黃菜。

舟人魚貫行。時過綠揚岸。
縮首避枝橫。

漸見城洲山。迎人得眼明。
千里迎母到。

今日始入京。行厨謀友辨。
一瓢膝前傾。

洗杯長流水。慈顏方暢榮。
同舟喧笑語。

○偶成

全

肉氣謀存誰置評。自嘲多事老書生。

一窓風雪妻兒臥。奮筆燈前紙有聲。

○戊辰作

板垣退助

(五十八)

出師未曾汚天兵。一死只期竹帛名。

(六十八)

彈子飛行亂如雨。

喜看壯士躍登城。

○失題

松林飯山

世評紛々亂如絲。
磨得一團方寸鏡。

不是諛辭即妬辭。
自家妍醜自家知。

○經七里濱入鎌倉

服部南郭

伊昔鎌倉古障堡。
相陽猶餘十萬兵。
稻崎回岸海水高。
三軍義烈泣鬼神。

新田猛將自此道。
守隘無地虛可擣。
旌旗閃々遍洲島。
大將沈璧為懇禱。

須臾廣斥退潮乾。

海變桑田破天造。

前隊已聞拔郊壘。

殺傷積崇如獲雉。

攬槍暴出相山搖。

海濠顛倒大鯨死。

君不見古來戰場血流鹵。

今日主客皆黃土。

黃土空埋蒼精龍。

波洗尺鐵無全銖。

洲沙漠々行人望。

唯有當年老孤松。

○和春簾雨窓

賴三樹

(七十八)

春自往來人送迎。
落花雨是催花雨。

愛憎何事分陰晴。
一樣檐聲前後情。

(八十八)

○偶作

瓊浦邊防是要衝。
挽回古昔吾家氣。

鍋島閑叟

桓々熊虎勢縱橫。
磨出天正文錄鉉。

○過桶狹間

太田錦城

東軍兵士固非孱。
鑿戰殊勳亦何用。

千古敗興皆是天。
本能寺裡一朝煙。

○謁會津參議公廟

蒲生君平

廟古悲風對落暉。
願望山川前封地。

白楊蕭索葉初飛。
淚落關東一布衣。

○逸題

西鄉隆盛

建業唯期華盛東。
半宵提劍望寒月。

鬪爭獨希那破翁。
今古興亡兩眼中。

○無題

松平春嶽

權貴爭登猿若坊。
吾生不喜區々技。

彩棚呼酒伴紅妝。
坐見乾坤大劇場。

○聞下田之開港

釋月照

(九十八)
七里江山附犬羊。
櫻花不帶腥膻氣。

震餘春色定荒涼。
獨映朝陽薰國香。

(十九)

○偶成

勝安房

君不聞火船雄飛數万里。
 颯舉長驅入蒼茫。
 車輪轉濤鯤尾動。
 南極沈々初月輝。
 俯推海圖仰窺天。
 無數島嶼翠一痕。
 一自宇內歸掌摩。
 嗚呼人生局促何足恃。

宇宙雖廣咫尺裡。
 恍然恰如遊海市。
 高帆飄風鵬翼起。
 冰山疊々連天峙。
 形象歷々掌上視。
 翠裡包含幾洲里。
 竟恣吞噬碧眼士。
 小信大義誤是非。

(一十九)

既將功名謝雲波。
 安得遠識如伯氏。

○從軍行

小原鐵心

十年征役若爲情。
 已矣關山殘月裡。

七入江都五帝京。
 白人鬢髮是鷄聲。

○偶感

西鄉隆盛

幾歷辛酸志始堅。
 吾家遺法人知否。

丈夫玉碎羞瓦全。
 不爲子孫買美田。

○述懷

雲井龍雄

(二十九)

少小讀破万卷書
道與世背無用處
破產傾身多結客
山東豪傑半屬望
從散約解壯圖違
一朝自悔心恍然
君不見有窮女字嫦娥
我亦將遠探其窟
亦不見緱山仙子其名晉

欲討聖源遡洙泗
放蕩却是一俠徒
奮爲六王進奇策
共謂秦兵擊可退
天高地厚亦跼蹐
深恥平生氣宇窄
一飛奔月々爲家
手攀天挂折其花
駕鶴漂渺斬雲陣

我亦將遠極八宏
聞說八小州外別有五大州
烏拉之山太平海
一世俊髦盡把臂
然後稅駕故山瀟洒伴松菊

橫絕弱水進我輒
長風好放波浪舟
去而一周全地球
萬國奇勝盡屬眸
一世能事庶幾將始休

○楠公墓下作

口羽貞順

(三十九)

前狼後虎事紛紜
全族殺身扶正氣
威靈永護南山月

勞戰心知難策勳
七世存憾掃妖氛
魂魄空迷北闕雲

(四十九)

讀史多年燈下淚。

即今來，弔灑碑文。

○芳野

藤井竹外

古陵松柏吼天飈。
眉雪老僧時止掃。

山寺尋春々寂寥。
落花深處說南朝。

○辭世

山中一郎

苦學多年業未成。
二十五年如一夢。

一朝謀敗死不輕。
誰使後人知我誠。

○三形原懷古

森祐信

誰入臥榻蹴我枕。

甲州，禿顱粗豪甚。

(五十九)

秣我馬兮繕我兵。
濱松兵馬有誰敵。
一聲號箭流鏑響。
外城直接三形原。
曹騰追北吾事敗。
腹背受敵難脫死。
遺恨不斫老蛇豕。
恨稟人制不快意。
監子掣肘定何心。

詰朝之事命是聽。
道路陸續傳羽檄。
劔鳴室兮馬躍櫪。
鋒蝟互逼八千軍。
寧料老賊餌我奔。
衆潰陣敗勢傾盆。
齒牙軋々惱英魂。
勝算坐使謬措置。
竟不使伸我一臂。

(六十九)

死生有命勝敗常。底事援兵無剛腸。
四隣呆然坐環視。無復一矢援孤壘。
縱無一矢援孤壘。衆心長城最足恃。
君不見南首則仰北首俯。遊魂結草報明主。
又不見三万甲軍無噍類矣。後來誰是執牛耳。

○逸題

西鄉隆盛

才子元來多過事。議論畢竟世無功。
誰知默々不言理。山是青々花是紅。

○蜘蛛

管原道真

微蟲猶有巧。結網自含情。稟氣安身小。
隨風轉質輕。檐前寬得地。籬上暫全生。
萬物皆如是。應知造化成。

○謁楠河內墳有作

賴山陽

(七十九)

東海大魚奮鬣尾。蹶起黑波汗黼屨。
隱島風雲何慘淒。六十餘州總鬼虺。
誰將隻手擺妖氛。關西自有男子在。
東向寧爲降將軍。揮戈擬招虞淵日。
執插同刷即墨雲。旋乾轉坤答值遇。

(八十九)

酒掃輦道迎鑾輅
李郭未必安天步
前狼後虎事復難
沒身賊陣重不還
全家骨肉殲王事
偏安北闕向何地
郊樹難認櫻井驛
刀折矢盡臣事畢
七生人間滅此賊

論功睢陽最有方
出將入相未陞班
獻策帝閣何得達
猶餘兒輩繼微志
非有南柯守舊根
攝山逶迤海水碧
訣兒呼弟來戰地
北向再拜天白陰
碧血跡化五百歲

茫茫春燕長大麥
十有三世何所存
万世之下一片石

君不見子叛弟鬪互噬吞
何如忠孝萃一門
長留英雄之淚痕

○送人

會澤正志

雄藩元欲育書生
要識乾坤活歷史

跋涉雲山千里程
須諳世態與人情

○無題

松平春嶽

(九十九)

紅紫春嬌解語花
風流却在冶遊外

彼都人士日豪奢
竹樹深邊閑煮茶

(百)

○失題

藤田東湖

既以吾生付彼蒼。蒼天底事荐降殃。
前身無是神農否。万苦千辛日夕嘗。

○偶成

全

双行浪々憂時淚。一片耽々報國心。
倘使人間無酒榼。不知何物洗胸襟。

○有歎

佐久間象山

不可諫者昨日之事害已成。不可測者今日之勢心更驚。
陸有豺狼水有

鱷。攙槍熒惑照天赤。陵犯成威多驕恣。天下名言倒且錯。肉食失計但竊位。藿食寧不腦塗地。大厦將傾非所支。明者祇應尙其志。我既不能學伍子胥。抉眼懸城門。又不欲藤房卿髡髮逐水雲。只願得似武陵桃源處。肥遯高隱世上榮。枯盛衰永不聞。

(一百)

○獄中作

全

(二百)

不_レ思_二城下_一爲_レ盟_チ恥_一
伯帙議_ス強_チ長崎港_一
異時輕_ス敵_チ已_ニ非_レ計_ニ
幽憤滿_テ胸_ニ無_レ所_レ泄_ス

却_チ把_テ忠_ニ貞_ニ抱_テ忌_ニ疑_一
聖東假_ル地下_チ田_一涓_一
今日折_ク衝_チ知_ル是_レ誰_ゾ
獄中瀝_テ血_チ錄_ス此_ニ詩_一

○詠史

梁川星巖

當年乃祖氣憑凌
今日不能除_レ外_レ讐_一

叱咤風雲捲_テ地_チ起_ル
征夷二字是_レ虛稱

○述志

大橋順藏

倉皇折_レ膝拜_テ夷_ニ蠻_一

苟且何_ッ知_{ラン}釀_ス後_ニ艱_一

恨殺滿朝林立_一士

一人無_ニ復_ニ似_ニ椒山_一

○逸題

伴林六郎

本是神州清潔_一民
如今棄_レ佛_々止_レ恨_一

誤_テ爲_テ佛_一侶_ト說_ク同_ニ塵_一
本是神州清潔_一民

○書感

雲井龍雄

(三百)

粗豪自_ラ許_ス國_一干城_一
齊趙渝_テ盟_チ秦業立_一
輸_レ誠_チ或_ハ不_レ回_レ天_一意_一
脫_レ却_レ人_一間_一多少_一異_一

胸裏常_ニ儲_フ百_一萬_一兵_一
蜀吳構_テ難_チ魏謀成_一
守_テ節_チ唯_ニ須_ニ舍_ニ我_一生_一
橫_ル空_ニ正_レ氣_一浩然_ト盈_ッ

國歌の部

○ さして行く笠置の山を出しより

後醍醐天皇

天が下には隠れ家もなし

○ 皆人の心の限りつくしてし

孝明天皇

後にぞ頼め伊勢の神風

○ 東路の末まで行かぬいな崎の

宗良親王

清見が關も秋風ぞ吹く

○ 人は皆さしいづるこそ宜かりけれ

豊臣秀吉

軍のときも魁をして

○ 吹く風を勿來の關とおもへども

源義家

道もせに散る山ざくらかな

○ 埋木の花さく事もなかりしに

源頼政

身のなる果ぞあはれなりけり

○ 如何にせん頼む蔭とて立寄れば

藤原藤房

なほ袖ぬらす松の下露

菅原道真

流れ行く我は水屑とやらぬとも

君柵となりて留めよ

源義経

いせ島や鹽汲む神の月影を

波に残して返る海士人

梶原景高

武士の取傳へたる梓弓

引ては人のかへるものかは

平忠盛

行く人を招くの野邊の花すゝき

今宵もこゝに旅寐せよとや

平重盛

ちゝとのみ啼くらす間に簑虫の

聲弱り行く秋の風かな

平經盛

古郷や焼野の原と返り見て

またしも烟の波路をど行く

薩摩守忠度

荒にける宿とて月は替らねど

ひかしの影は猶ぞ戀しき

(百八)

○ 幾度かおもひ定めてかはるらん

最明寺時頼

頼むまじきは我心なり

青砥 藤綱

○ 重ねても猶ほ寒き夜を麻襖

一重だになき者いかにせん

北條 泰時

○ 事しげき世の習ひころ物憂けれ

花の散なん春もしられず

細川 頼之

○ 静かなる心の中や松風の

水よりも猶ほ涼しかるらん

新田 義貞

○ 我袖の涙に宿る影どだに

知らで雲井の月や澄むらん

武田 信玄

○ 誰も見よ満れば頼て欠く月の

いさよふ空や人の世の中

足利 直冬

○ 古へに替らぬ神の誓ひなれば

人の國まで治めざらめや

平 維盛

(九百)

(十百)

生なまれては終おひみ死しぬてふ事ことのみぞ

定さだめなき世よみ定さだめ有ありける

朝倉義景

戦たたかひの時ときの一字いちじに竿さきさして

火ひにも水みづも入いりて戦たたかへ

藤原俊基

古いにしへも斯かるためしを菊きく川の

清きよきながれふ身みをやしづめん

上杉謙信

武ぶ士のよろひの袖そでをかたしきて

枕まくらにちかき初はつ雁かりの聲こゑ

(一十百)

○

かへらじとかねて思おもへば梓あづき弓ゆみ

楠正成

無なきかすに入いる名なをど留とどむる

源齊昭

○

敵てきあらばいでもの見みせん大丈夫おとなの

彌や生よひ半なかばのねむりざましに

源光

○

見みればたい何なんの苦くもなき水みづとりの

足あしにひまなき我わがれもひかな

蒲生氏郷

○

限かぎりあれば吹ふかねど花はなはちるものを

(二十百)

心みじかき春の山風

太田道灌

斯るときこそ命の惜しからめ

かねてなき身と思ひすてずば

藤原為明

おもひさや我敷島の道ならで

浮世の事を問はるべしとは

大石良雄

ながらへて花をまつべき身ならねば

なほ惜しまるゝ年の暮かな

香川景樹

神山は松の二葉も引ものを

葵のみとも思ひけるかな

藤田東湖

なき数に入るぞかなしき芳野山

花のあらしに心のこして

渡邊華山

麻繩にかゝる身よりも子を念ふ

親の心をとくよしもがな

蒲生君平

比叡の山見おろす方を哀れなる

今日九重のかずしたらねば

(三十百)

(四十百)

われを我と思し召かや天皇の

玉の御聲のかゝる嬉しさ

高山彦九郎

身はたとひ武藏の野邊に朽るとも

吉田松陰

といめ置かまじ日本魂

我罪は君が代れもふ真心の

頼三樹

深からざりし印しなりけり

釋月照

大君の爲には何かれしからん

薩摩の瀬戸に身は沈むとも

平野國臣

我胸の燃ゆる思ひにくらぶれば

烟りは薄し櫻じま山

武田耕雲齋

咲く梅の風に空しく散るとても

馨りは君が袖ふうつらん

福原越後

よしや善し世を去るとても我心

御國のためみ猶つくさばや

久坂通武

(五十百)

(六十百)

斯くすれば斯くあるものと知りながら

止むにやまらぬ大和だましひ

藤本 鐵石

○ 十津川の片腹黒き鮎の子は

落ちて何國の瀬にや立ちらん

梅田 雲濱

○ 君が代をおもふ心の一筋に

わが身ありとも思はさりけり

安積 武貞

○ 國の爲め君の爲めは惜しからぬ

數にもあらぬ賤が身なれば

(七十百)

○ たへて吹く嵐の風の烈しきに
安島 帶刀

なみたまるべき木々の白露

日下部伊三次

○ 五月雨の限りありとは知りながら

照る日を祈る心せはしき

高野 長英

○ 歎かるゝ身よりも歎く老の身を

歎きころすれ歎かるゝ身は

蓮田 藤藏

(七十百)

○ 武藏野のあなた此方に道はあれど

(八十百)

我が行く道は大丈夫の道

真木保臣

後れなば梅もさくらに劣るらん

さきがけてこそ色も香もあれ

伴林六郎

破れたる鎧の袖もつくろはん

菊ともみぢの中原の里

八田知純

芳野山霞の奥は知らねども

見ゆるかきりは櫻なりけり

森梅溪

こと國の何くにも無き山櫻

うつしてそ見んもろこしの春

本多素行

近江路の人に見せばや鏡山

くもらぬ御代の春や來ぬると

關鐵之助

香はしき名のみ残らば散る花の

露と消ゆとも嬉しからまじ

伊藤武明

日本の本の匂ひも高ささくら山

ぬるゝも嬉し花のした露

(九十百)

(十二百)

世をおもふ友ならなくに時鳥

野村彝之助

初音ゆかしき夜半の一聲

高橋多一郎

漕きいづる舟の行衛もしら浪の

いつしかうらに春や迎へん

川上忠固

いかにせん梶も綱手も捨小舟

よるべも浪に漂ふぞ憂き

村田清風

西北の風ふせぎして暮うてよ

我が日の本の櫻見る人

○月照の入水をいたみて詠める

平野國臣

花の都も秋は猶ほ。夕べさびしき風情なり。名は流れたる清水や。落ち來る瀧の音羽山。秋の葉色の染むごとに。散るや紅葉のちりくど。亂れ行く世の浪花江や。蘆のさはりは繁くとも。猶ほ世の爲めに身をつくし。盡さんとても筑柴潟。波影の岸の波ならぬ。操をいつか深緑。色も替らぬ青柳の。驛路を越て香椎潟。たゝらの橋を打渡り。千代の松原千代かけて。万代かけて君が代の。千歳の松ふよそへつゝ。神に歩みを箱崎の。社にかけし四

(一十二百)

ツ文字の。筆の主をよく問へば。延喜の帝かしくも。御手をば下しませりつゝ。爰もむかしは石疊。重ねくし白浪の。よせし昔しを忘れじと。うらみ浦半の片だすき。かけて歎くも哀れなり。沽衣塚の沽衣。吾身お着たる心地せり。やがて博多の假住居。こゝも浪風さはがしく。又たゆく方は薩摩海。沖の小島にあらねども。心細くも都あて。誰か哀れと思ふらん。たよるは心筑紫海。一人の外に打わけて。語らふ人も浮き枕。波路へだて、野間の關。野間の關屋の關守に。せきとめられて又舟に。乗るも夫ぞと寄るあだみ。波にゆられて行く先きは。黒の瀬戸てふ名もうしや。頗て鹿兒島かごの鳥。つばさ縮

勇氣 勃然 劔舞法終

めて潜みしが。又た木枯の風と驚きて。日向をさして船出せし。日は神無月望の夜の。傾く月ともる共に。照りかゝやきて曇りなき。身は大君の爲にとて。爰に一人の薩摩海。いかなる縁し前の世に。契りも深き船の沖。底の藻屑となりぬるを。乗合ふ人も船人も。櫂の雫も露はども。さりとは知らぬ白浪の。立さはげども甲斐ぞなき。猶は東雲の明けがらす。なくより外はなかりけり。

明治廿六年十月二十日印刷
明治廿六年十月廿六日發行

版權



編輯者 東京市淺草區須賀町十九番地

西 森 武 城

發行者 東京市日本橋區堺町八番地

伊 藤 倉 三

印刷者 東京市日本橋區藥研堀町卅三番地

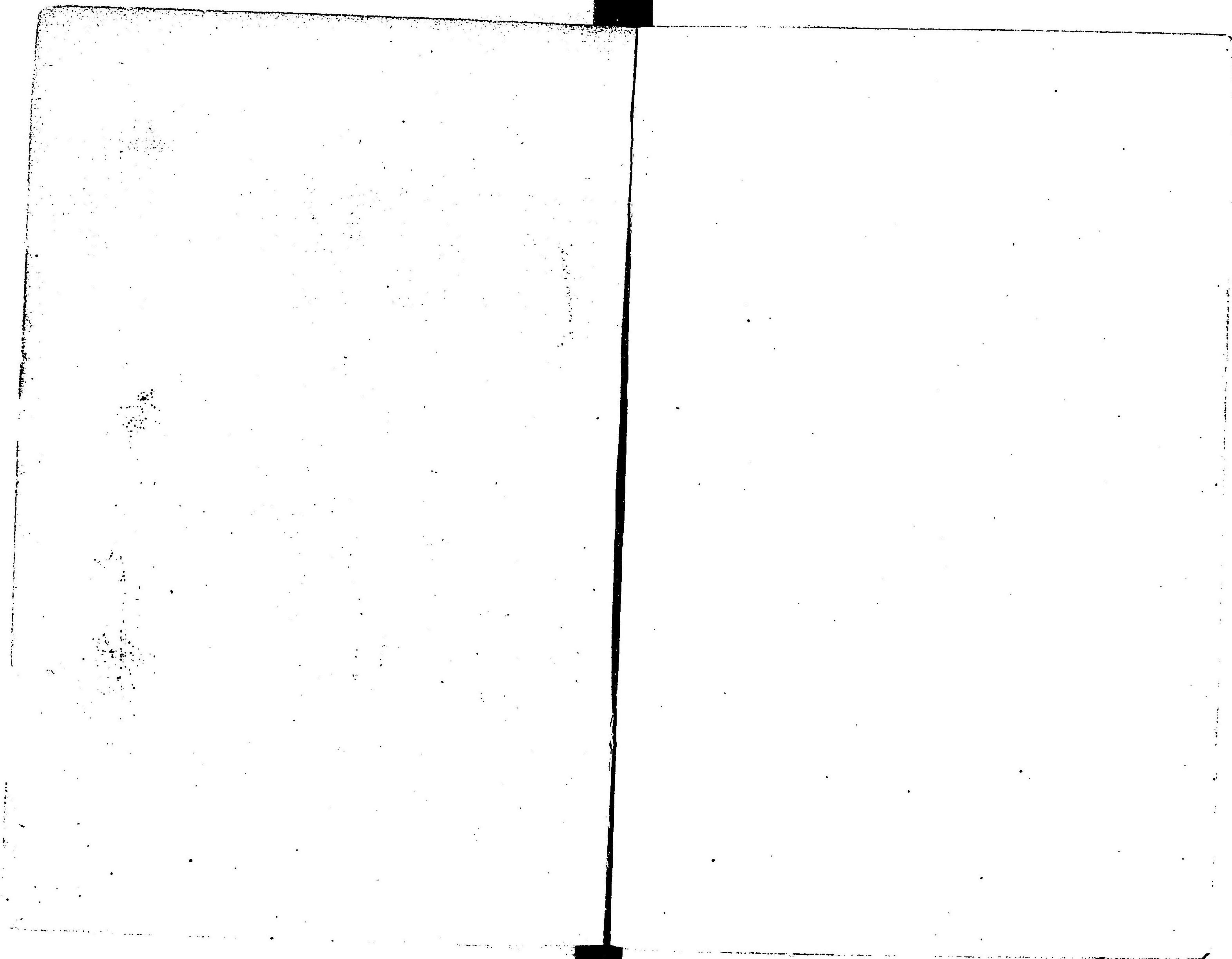
仁 科 衛

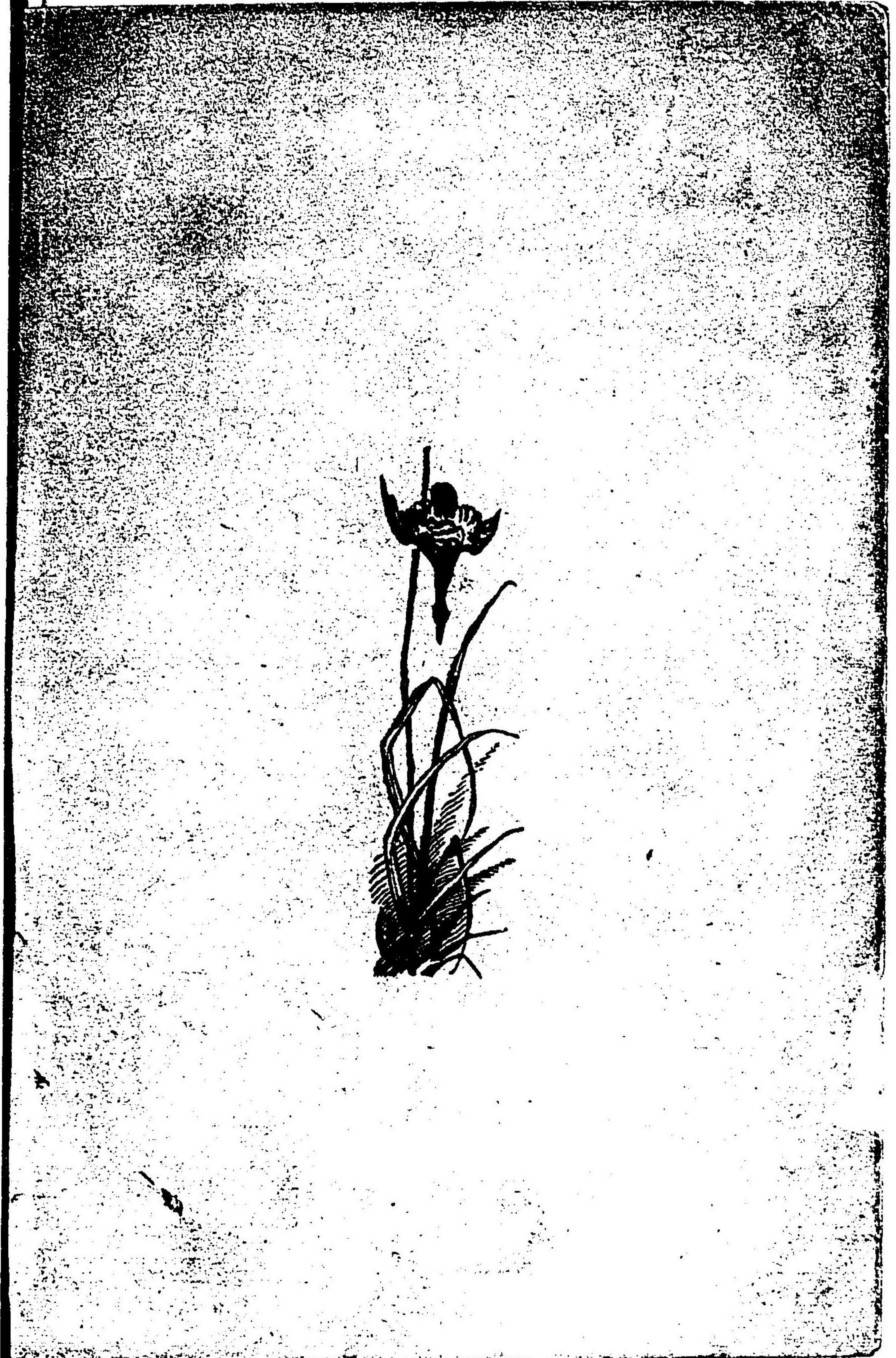
發兌元 東京市日本橋區堺町八番地

金 盛 堂

印刷所 東京市日本橋區藥研堀町卅三番地

厚 信 舍





身氣
動然

東京

劍舞法
完

武式圖解并豪傑詩歌

金盛堂藏版

武骨散人著

074588-000-5

特63-135

劍舞法

武骨散人／著

M26

CEJ-0044

